

幼児の造形表現素材としての紙と形状に関する考察

大阪芸術大学短期大学部 通信教育部保育学科 特任講師 簗 晶子

幼稚園教育要領・第 1 幼稚園教育の基本において、「幼児期の教育は(中略)環境を通して行うものであることを基本とする。(中略)教師は、幼児と人やものとの関わりが重要であることを踏まえ、教材を工夫し、物的・空間的環境を構成しなければならない。」と記されている。様々な場面で用いられる造形表現素材としての紙は身近な物的対象である。幼児の造形活動において、素材が果たす役割は重要であると考えられる。紙工作、紙立体においては紙の種類に留意した実践を見ることができ、描画活動においては紙の工夫や選定があまり行われていない印象を持った。

論者は本学幼児教育造形分野を担当し様々な描画技法を指導している。教材準備の際、厚さ、絵の具のにじみ具合、やぶれにくさ、表面の平滑さなどを確認し適した紙を選ぶことを意識しているのに対して、子どもの保育教育現場においては紙の種類は少なく白か色画用紙の選択程度である現状を目の当たりにした。また、多くの画家は支持体として画面の大きさを自由に設定しているのに対して、子どもの保育教育現場において紙の大きさや形状は 4 つ切り画用紙や AB 版サイズといった一般に流通している規格サイズの四角い画用紙をそのまま用いることが多いように感じられた。これらを明らかにするため、大阪芸術大学附属幼稚園教諭、造形教室を担当している小規模保育園教諭及び本学保育学科の学生を対象として幼児の造形表現素材としての紙に関するヒアリングとアンケート調査を行った。幼児の造形活動においてどのような紙を使うかとの問いかけに、最も多かった回答は画用紙であった。他に折り紙、和紙、花紙、ダンボール、新聞紙、包装紙といった多様な紙の使用が明らかとなった。市販の紙だけでなく本来の用途を終え捨てられるはずだった紙を再利用して素材として活かす視点や現場での実践が多く見られた。幼児の造形表現素材としての紙と幼児期における持続可能な開発のための教育の影響や領域「環境」との関わりに着目するきっかけとなった。調査により描画に使用する紙の形状が主に四角い紙であることが明らかになった。この四角い紙の形を任意の形に変更した実践を行い、紙の形状が子どもの造形表現に与える影響を考察した。

規格サイズの四角い画用紙の形状を任意の形に変更するためにコンピュータで入力した形状データを送りシート状のものを切ることでできる機械、カッティングマシンを導入した。ブラザー社のスキャンカット DX SDX1000 はカッティングマシンの中でも、特に様々な素材に対応できる製品であり画用紙だけでなく厚紙、段ボール、薄いプラスチックシート、布地、フェルト、ウレタンフォーム、シールやステッカー素材といった最大厚さ 3mm までの様々なメディアを扱うことができる。また、幼児の教材として使用可能な模様を含むたくさんのカット形状が内蔵されており、本機のタッチパネルを使いパソコンと接続せずカットすることもできる。任意の形を切り抜く方法としてデータを用意せ

ず、既存の形を本機でスキャンしてカットできる手軽さも特徴である。これにより今後の研究や教材制作及び学生の造形活動にも活用が期待される。今回は丸い形状の紙に留意した実践と考察を行った。丸い形は子どもの絵の発達段階において意思のない線や点からしっかりと意思を持った強い曲線や円形などが描けるようになる錯画期に自然に生まれる。塊を転がしたり液体を垂らすと広がり丸い形が生じる。丸い形は幼児の造形に頻繁に見られる形であり、子どもの環境に配される人工物にも多くみることができる身近な形状である。使用頻度が高い四角い画用紙と比較して、丸い画用紙に描いた経験はあるかという問いに本学保育学科の学生の半数はないと答えた。しかし、幼稚園・保育園教諭は丸い形を生かした造形活動を行った経験が豊富であり、顔や器に見立てた園での制作資料から多くの実践例を知ることができた。

丸くカットした画用紙を使い 3 つの実践を行った。1 つ目は 1・2 歳を対象とした小規模保育園での造形教室において、四角い紙と丸い紙へのシールの貼り付けを比較し、活動の様子や作品の違いを考察した。丸い形は上下左右の制約がないため四角い紙では見られない紙を動かしながら制作する様子が見られた。貼り付ける行為に取り掛かる時間が短い子どもが多くなり活発な活動の助けとなったと結論づけた。保育者から四角い画用紙と比べ尖った箇所がないため低年齢児の造形表現素材として安全で有効だとの意見があった。2 つ目は本学通信教育学部保育学科の学生の図画授業の導入時に、クレパスを使い自由に四角い紙へ描画する体験と、皿に見立てた丸い紙への描画する体験を行いその感想を集めた。丸い画用紙を使った描画では描き始めるまでの時間が短縮され、描画しながら周囲との交流が多くみられた。3 つ目は丸い形を教材として取り入れるための発想を見つけるために、大阪芸術大学通信教育部の有志によるグループ展(『塊展』)で丸い形から連想される作品とイラストを制作し、参加型展示としてアイデアを募った。7 日間で 481 名が来場し子どもを中心として多くの参加があった。丸い形から多くの発想が生まれることが実証された。さらに、本学保育学科 1 年生に丸い画用紙をつかって子どもとどんな造形ができるかと問いかけ、幼児の造形表現素材としての紙の豊かなバリエーションと形状の可能性を示唆し、学生からアイデアを募り幼児教育への自発的な関わりや発見を促した。本研究で目指した幼児の造形表現素材としての丸い紙を使った実践報告と有用性の立証に加え、その他の使用例を集め考察を深めた。既存の幼児を対象とした丸い紙を造形表現素材として紹介する書籍に丸い折り紙があり、数多くの作例が収められていた。今回行ったアンケートからは丸い紙の使用に比べ、丸い折り紙は幼児の造形表現素材として教育現場で取り入れられていない結果となった。今後さらに丸い紙を使った授業計画を本学学生と共に立案し、幼稚園における実践を行いその有用性を探りたい。